

# 大門坂

2月号 月田小学校だより

平成31年1月18日(金) 校長 小林幸雄

## 授業の面白さに魅了されて

私は、幸運にも月田小に教頭として3年間、2年の間を空けて、さらに4年間校長としてお世話になりました。9年前の4月、新任教頭として赴任した際、大門坂に寄せた挨拶文を次のように記していました。

ある日を境に、輝いていた選手もユニホームを脱ぎ、時としてコーチ業に立場を変えるものです。不遜にも、その選手と少し似た思いを抱きながら赴任して参りました。

何よりも私は、授業をするのが大好きで、もはや第一線に立つことが減ってしまうのかと思うと、やや複雑な思いがしたのであります。(後略)

「大門坂」H22年5月号

月田小一年目、その時、お世話になったのが、福田秀之校長先生でした。

今でも忘れません。最初の校内研修が終わろうとした時のことです。

「先生方、小林教頭先生の授業を見たいとは思いませんか?」と、福田校長先生が、いきなり提案をされたのです。提案の言葉が終わるや否や、先生方から拍手が起こります。そのため、翌週、4年生に国語の飛び入り授業をする運びとなったのです。



<始業式の日 4年生の授業風景>

校長先生に、一本取られたという思いと、校内研修を活性化したいという校長先生の意気込みを肌で感じたものでした。

という訳で、私は、授業の依頼があれば拒まない性分であります。そう言えば、先だっても研究主任の阿部先生から唐突に宿題が出されました。

「校長先生、眠育の授業をどこかの学年でやって見せてください!」という大胆な提案であります。

依頼されれば断る理由はありません。「よござんす!」とその場で答えてしまったわけです。

研究主任として、次年度を見据えた見事な戦略であります。(笑)

ところで、担任の先生が不在の折、教室に出向くことがあります。そうした時、プリントやテストの監視ではなく、授業の指定も珍しくありません。先だって、担任の留守を預かって2年生に詩の授業をしました。教材は、三好達治のわずか2行の詩です。

雪

太郎をねむらせ 太郎の屋根に雪ふりつむ  
次郎をねむらせ 次郎の屋根に雪ふりつむ

まず、何度も教材を音読させます。全員に10回以上音読させました。多い子は20回を超えていました。

「目をつむってごらん下さい。この詩の世界を頭に描きます。この詩を読んで頭に浮かんだものを言葉にして書きなさい」と指示します。

子どもたちは、次のように発表しました。

・雪・屋根・家・灯り・枯れ木・真っ暗・夜

どの発言も認めます。

さらに、次の指示を出します。

「もう一度、目をつむってごらん下さい。ドアがあったら、あけて中を見てごらん下さい。見えてくるね。(ウンと頷く子どもたち)見えてきたものを書き出しなさい。何個書いてもいいよ」

さっきより生き活きとした表情で、鉛筆を握り

しめる子どもたち…。

子どもたちは、嬉々として発表しました。

・太郎・次郎・布団・タンス・お風呂・こたつ・みかん・窓・土間・かまど・時計・椅子・机・ベッド・里芋を煮ている・神棚・囲炉裏・ねずみ

わずか2行の詩ですが、詩の世界の広がりや奥行きを感じながらの楽しい発表です。



<始業式の日 3年生の授業風景>

この後、「家は、何軒ありますか？」と尋ねると、6通りの考えが出されました。

1軒(1名)、2軒(3名)、3軒(3名)、

5~6軒(3名)、30軒(2名)、1万軒(1名)

発表の後、「1軒はおかしい」という意見が出ました。さらに「1軒だと寂しい」と、一人の女の子が指摘しました。包み込むような優しい詩のイメージにそぐわないと考えたのでしょう。

1軒という解釈は、太郎と次郎と一緒に住んでいるという捉え方です。太郎の寝ている側の屋根と次郎の寝ている側の屋根に…と考えれば無理はありません。解釈は、様々に可能です。3軒以上と考えた子は、詩の続きをイメージしているのです。三郎、四郎、五郎、…と詩の広がりを感じているのです。この時、「倅太郎くんも！」と声がありました。(笑)

最後に、「眠らせたのは、誰ですか？」と聞きました。意見は、大きく2つに分かれました。

「雪」と「両親(母)」という2つの考えです。

ちなみに、原実践は、東京の向山洋一氏です。同じ実践を真似て授業したとしても、その人の授業の腕により大きく異なるものです。

同じ演目でも<sup>はなし</sup>断家によって、全くその妙味が異なるのと同じです。私がどの程度、原実践者に近

づけたか…それは、永遠の課題であります。

それだけに授業は、奥深いのであります。

## 6年認知症キャラバン

1月16日(水)、6年生が「認知症サポーター養成講座」を受けました。講師は、月田にお住まいの8名のキャラバンメイトの方々です。

歳を重ねると身体のあちこちにきしみが生じます。認知症は、脳の病気です。近い将来、高齢者の5人に1人になると言われています。講座では、認知症の方にどのように接したら良いのか、具体的な事例を元に学習することができました。クイズに寸劇、DVDに朗読ありと変化に富んだ内容で、分かりやすく丁寧に教えてくださいました。最後に、認知症サポーターの証としてオレンジリングが子どもたちに贈呈されました。

<児童の感想>

・認知症の人は、分かりにくい人とか、怒りやすい人と思っていました。でも、今回勉強して認知症の人へのイメージが変わりました。一人で責められて傷ついたり不安に思ったりすることがあることが分かりました。(七映)

・認知症の人に対する接し方が変わりました。優しく話しかけたり、ゆっくりと話したりすることを、もし会ったらしたいです。また、落ち着いて話しかけることだけでもだいぶ違うことを知りました。(絢香)

・今日の勉強で、今までぜんぜん知らなかった認知症のことをたくさん知ることが出来たので、いつ認知症になっている人を見かけても、すぐ優しく対応ができるようにしたいです。(真衣)



<寸劇：迷子になったおばあさんに声をかける>